國學院大學学術情報リポジトリ

1955年「旅欧日記」から見る謝冰心の社会的地位

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000902

1955年「旅欧日記」から見る謝冰心の社会的地位

牧　野　格　子

1、はじめに

1951年8月、謝冰心一家はそれまで5年間滞在していた東京から突然中国大陸に帰国した。到着後、謝冰心・呉文藻夫妻は周恩来に呼ばれ、中南海を訪問した。それ以後、二人は改造教育を受け入れ、建国されたばかりの中華人民共和国の体制に適応していくことになる。

1950年代から始まる謝冰心と呉文藻の私的日記が、2004年に遺品の中から発見された。合計23の封筒の内、22冊の手帳に書かれた日記は、中国福建省福州市にある冰心文学館に所蔵されている[1]。王炳根・冰心文学館元館長によって、『冰心日記』が2018年に出版された。これは、王元館長が、劉嶸という研究者と共に十数年にわたって解読を進めた成果である。筆者は、劉東方・冰心文学館現館長より許可を取り、2018年3月、2019年9月と2回の日記原本の閲覧を行った。原本には『冰心日記』には収録されていない箇所も多く存在する。それらの多くは当時の政治に関わることである。

2019年より、筆者は、王炳根編『冰心日記』の冒頭に収録されている「旅欧日記[2]」に関し、原本との対照を通して、いくつかの誤りと補足すべき箇所を見つけた[3]。本論文では、「旅欧日記」と呼ばれる一連の箇所の対照から得られた成果から、謝冰心の当時置かれた社会的地位を確認する。さらに、謝冰心は1953年の中国大陸に帰国後、児童文学者として活動し始めるが、1950年代の創作状況と背後にあった事情についても述べたい。

2、1955年「旅欧日記」の概要と日程

1955年の「旅欧日記」とは、謝冰心が1950年代から書き始めた私的日記の最初の箇所に当たるものである。「旅欧日記」との名称は謝冰心が付け

たのではなく、『冰心日記』の編者である王炳根が便宜的に名付けたものである。期間は、1955年6月29日から7月28日までである。この時の欧州行きは、同年7月7日から10日までスイスのローザンヌで開かれた世界母親大会の参加のためであった。

「旅欧日記」の冒頭に付された王炳根による解説によると、欧州への出発までに以下の準備が行われたという。

> 1955年6月13日より、冰心は李徳全を団長とする中国婦女代表団に参加し、スイスのローザンヌで開かれた世界母親大会に出席し、同時にフランスのパリを訪問した。この大会に出席するため、外交部は一連の報告を行った。その中には、外交部の文世員によるフランス政治、経済と党派等の状況に関する報告、薛暮橋の経済建設に関する報告、何成湘による宗教問題について、鄧穎超による出国工作の経験、彭峰によるスイスの概況の紹介、余志英による出国関連の問題、曹孟君による世界母親大会の発展状況に関する紹介、呉全衡による国際婦人運動、張淑義による国際児童問題の報告が行われ、同時に羅瓊が周恩来総理による世界母親大会出席に関する指示を伝え、陳毅副総理が国際情勢に関する報告を行った。29日、中国婦女代表団はスイスのローザンヌへ世界母親大会出席のため出発した[4]。

この時の欧州訪問のために、綿密な準備が行われていたことが窺われる。実際、日記現物にはこの時行われた講演のメモも書かれている。謝冰心を含む中国婦女代表団のこの時の旅程は如何なるものであったか、表①にまとめた。30日間にわたる旅程であるが、かなりのタイトなものであったことが分かる。それぞれの訪問国での活動について、要約すると以下の通りである。

1955年6月29日～7月2日　ソ連→チェコスロバキア
1955年7月2日～5日　プラハ　婦女連との交流、名所観光
1955年7月5日～12日　ローザンヌ　世界母親大会、精力的に交流。
1955年7月12日～22日　パリ　視察、交流、観光
1955年7月23日～28日　フランス→スイス→チェコ→モスクワ

最初と最後のソ連はほとんど経由地であり、モスクワで買い物と観光をした程度であった。

チェコスロバキアでは、交流活動と名所観光程度の活動であった。観光地について比較的詳細に書かれており、例えば、有名な時計台やカレル橋などが挙げられている。他にゴットワルトの霊廟やスターリン像を見学している。プラハ市街を見下ろす丘にあった巨大なスターリン像は、スターリンと兵士がかたどられていた。1955年5月1日に公開されたが、56年のフルシチョフによるスターリン批判により、1962年爆破された。謝冰心は、短命であった公開直後のスターリン像を見たことになる。

当時、チェコスロバキアは中国と同様、共産主義側の国家であった。チェコスロバキアは、1939年から続いていたドイツによる占領から1945年に独立した後、共和国体制が復活した。1948年にチェコスロバキア共産党のゴットワルト大統領が実権を握り、独裁政権の下、事実上社会主義国化された。ゴットワルトは1953年に死去し、1955年当時は後任のザーポトツキー大統領の体制下にあった。中華人民共和国とは、1949年建国後すぐ国交を結び、さらに、1957年には中捷友好通商条約が結ばれた。1956年のスターリン批判までは、ソ連との関係も安定していた。

謝冰心ら中国婦女代表団を迎え交流した女性団体は、チェコスロバキア婦人同盟（Czechoslovak Women's Union , CSWU）と考えられる。第二次世界大戦後、女性団体は、社会主義国家体制を後援するものとして再編成された。先に、チェコスロバキア婦人評議会（Czechoslovak Women's Council , CWC）が存在していたが、政府と相容れず、CSWUが当時のチェコスロバキアで唯一の女性団体となったという[5]。

チェコ訪問を終えた謝冰心は、7月5日世界母親大会参加のため、スイスのローザンヌに移動した。世界母親大会[6]とは、前年の1954年3月1日にアメリカによって行われたビキニ環礁水爆実験への抗議を発端に、世界中の婦人団体に呼びかけ開催された大会である。発端となった日本婦人団体連合会は、平塚らいてう、河崎なつ等5名の連名で「原水爆禁止」の内容を含む意見書を国際民主婦人連合（以下、WIDF）執行局に送り、「世界母親大会」の開催が採択された。母親の立場から平和を願い、その趣旨に国際民主婦人連合が賛同した形となった。参加者は、68か国から1060人であり、日本代表は14人であった。中国からは、李徳全を代表とする中国婦女

代表団が派遣された。

この時の世界母親大会は、日本の女性運動家が原動力になったが、中心となった受け入れ団体は、WIDFであった。この団体は世界各国の女性団体が加盟しており、中国の団体も加盟していた。左翼的な要素の強い団体とされているが、実際は、様々な団体による複雑な組織を擁していたため一概には言えない[7]。

世界母親大会は、母親の立場から平和を訴えるという目的で開かれたが、実際は、日本の女性運動と原水爆禁止運動と密接に関わっていた。日本からの代表は、長崎の被爆者も含まれていた。しかし、他国の代表は、原水爆禁止運動とは関わっておらず、様々な背景を持つ各国代表が集まっていた。

実際に如何なる代表が参加していたのか詳細は分からないが、モニカ・フェルトン著『あたりまえの女たち』からはその一面を窺うことができる。中国からの参加者は、「土地をもった人たち（中国、ルーマニア）[8]」の中で書かれている。

リ夫人と呼ばれる中国からの女性は、幼い頃に家族を亡くし、衣食住も満足に与えられない過酷な環境の中で生き抜いた。結婚後も貧しく、戦争の時代を潜り抜け、1950年代の土地改革でやっと自らの土地を得て、安定した暮らしを得たという半生を語る。

リ夫人は非常に貧しい農民の出身である。中国婦女代表団には、李徳全、謝冰心をはじめ解放前に高等教育を受けた裕福な家庭の出身者も含まれる。文字通り、様々な階級からの参加者があったということになる。

では、謝冰心は会期中如何なる活動をしていたのだろうか。この期間中の日記からは、少ししか知ることはできないが、一部を見ていくと、インド、インドネシア、ドイツ、オーストリア、スイス、日本、ルーマニア、ソ連の代表団と交流をしている。特に、インド代表団は、前年と同年に行われたインド外遊で、代表団とは既知の間柄であった。

世界母親大会でのインド代表団との交流について、謝冰心は日記の中で以下の通り書いている。

スイス1955年7月6日水曜日

朝起床、ホテルで朝食を取る。午前、肯徳夫人[9]と接触し会話する。午後三時半、インド代表団が階下の交際室で中国代表団五人と交歓する。

インド代表が「統一の舞」を踊り、タゴールの詩を読み、夕食後アジア組の会議あり。同室の劉蘭[10]同志が到着。夜十時頃就寝[11]。

その前に参加したインド訪問については、後で詳述するが、2回のインド訪問において、大歓迎を受けた。さらにインドにとっては、大詩人であるタゴールの詩を訳したことのある謝冰心は、より親しみを覚える存在であり、この時も謝冰心はタゴールの詩を読み、友好をアピールしている。この時インド側が踊った「統一の舞」は分裂したインドの再度の統一を願うものなのか、インドと中国の友好を願うものなのか分からないが、インドと中国の代表団との親密ぶりが窺える。

他に日記の中では、WIDF会長（当時）のウジェニー・コットン夫人[12]の開幕の辞の中で語られた詩に感動したこと、団長の李徳全やアメリカ代表による演説も行われたことが書かれている。

大会終了後、1955年7月12日～22日にパリに移動し、フランス視察に参加した。期間は10日にわたり、この時の外遊の中で最長の時間である。場所はパリだけでなく、パリ郊外の各都市にも赴いている。この10日間の視察や活動をおおよそまとめると三種類の活動になるだろう。

一つは、パリ周辺の社会生活の視察である。例えば、パリ市内で一般住宅の見学、ルノー工場の診療所で無痛分娩の説明を受けたり、郊外のサルト県のルマン市で、学校見学、他に牛乳工場、障害児病院などの見学をしたりした。その中には、マダム・ポーレットの帽子店やクリスチャン・ディオールといった高級服飾店の視察も含まれているが、これらも特別というわけではなく、産業の一つとして視察活動の中に入っていたのだろう。

二つ目は、観光地の視察である。ルイ十四世のホールや彫像を見たり、ナポレオンの妻・ジョゼフィーヌの邸宅やマリー・アントワネット離宮であるの大小トリアノン宮殿を見学したりしている。プラハ滞在でもそうであったが、名所旧跡の観光は視察活動においては必ず入るものであったようである。

三つめは、現地の女性団体との交流である。当時のフランスの女性団体として、全国フランス婦人評議会（Conseil National des femmes françaises, CNFF[13]）が考えられるが、確証はない。フランス滞在中の日記には、ド・ラ・マール（De La Mare）夫人、ボンセルバン（Bonselvin）、

アーモン夫人など数人のフランス人女性の名前が出てくるが、いずれも如何なる人物であるかは不明である。ただ、おそらく女性団体のメンバーであり、ド・ラ・マール夫人は中国に行ったことがあるとの記述もあるため、中国に親近感のあった人物であったであろう。それは、謝冰心がフランスを去る際、特にド・ラ・マール夫人は駅まで見送り、別れがたい感情をあらわにし、親密さを見せていたとの記述に現れている[14]。

当時のフランスはもちろん西側の陣営であったが、その後、1964年に西側陣営でいち早く中華人民共和国と国交を結んだことから、1955年当時でも中国との接近に消極的ではなかったと考えられる。翟強「従隔閡到建交：1949年至1964年的中法関係[15]」によると、1955年当時は、その前年から始まった第四共和政の時期であった。第二次世界大戦後のインドシナ独立戦争の敗北により、フランスはベトナムから撤退した。冷戦下における元植民地独立に揺れるアジア情勢に影響され、フランス国内では中華人民共和国との国交を求める声が高まった。メンデス＝フランス首相、フォール首相の両内閣は、中国との関係改善の意思を表明し始めた。中国から視察団を認め、交流活動を進めていた。しかし、この時点では、冷戦構造下で、西側陣営の首領であるアメリカに反して中国と国交を結ぼうとはしなかったという。

第二次世界大戦後のアジア、アフリカ地域で独立の機運が高まっていた。特にアジア地域では、当時朝鮮戦争が終了したばかりであった。そうした新たな息吹に沸くアジア・アフリカが集まり、1955年にはバンドン（アジア＝アフリカ）会議が開かれ、独立国の結束が訴えられた。それに対抗する形で、世界母親大会の後、ジュネーブ四巨頭会談も開かれた。これらは、宗主国であったアメリカ、イギリス、フランス、ソ連の首脳が集まり、独立に対し如何に対応するか話し合われたものであった。

冷戦構造、植民地の独立といった世界情勢の中で、中国とフランスの間で比較的積極的に交流が行われていた。謝冰心は、チェコスロバキア、フランス、そして各国代表団の間で交流をし、世界母親大会の参加においても、任務を果たし、外交能力を発揮したのである。

3、謝冰心の外交能力

謝冰心は1950年代に多くの外遊に出ている。（表②参照）[16]。陰に周恩来の力があったと考えられている。アメリカ留学の経験を持ち、中華人民共和国成立前、中国共産党と敵対していた中国国民党に近い立場にあった謝冰心が、なぜ安定した特別な立場にいられたのかという疑問が沸くだろう。王炳根は謝冰心が選ばれた理由として以下の通り書いている。

> 1950年代初め、西洋はアジアの一部の国家、社会主義国家に恐怖感を持っており、ひいては洪水や猛獣のように見なしていた。しかし、共産党指導の下新中国の柔軟性の一面、人間味の一面を見せることは極めて重要であった。（略）団長が夫人を同伴できない状況下で、女性団員は非常に重要であった。彼女が代表するのは中国女性であり、中国の母親、温かく、美しさ、聡明さ、人生を愛し、尊ぶことであった。この時の冰心は国際舞台にひとたび現れると、新中国女性イメージの代弁者となった[17]。

謝冰心が外交の使者として選ばれた理由はその英語力だけではなかった。謝冰心がインドの大詩人であるタゴールの作品を翻訳したことがあることも大きな要素であった。タゴールは謝冰心に影響を与えただけでなく、五四時期の新文学に強い影響を与えた。中国文学の世界においても、重要な人物なのである。

謝冰心の外交能力に関して、前出の劉嶸も指摘しているが、謝冰心と1954年11月のインド外遊に同行した夏衍による記述がある。外遊での謝冰心の様子について以下の通り書いている。

> 彼女（謝冰心）は古今の知識に通じていて、英語も流暢だった。——ある時、我々はタゴールの故居を訪問し、歓迎の茶話会で、彼女が彼の作品を翻訳していたこともあり、タゴールの詩を二編英語で朗読し、その後、タゴールの中国と彼女の友好関係について簡潔に説明した。もう一つはネルー邸で昼食をとった時のことで、その場で冰心とネルーの娘（現在はガンジー夫人）は、何年も外交事業に従事する

我々でも感銘を受けた。彼女の卑屈でもなく傲慢でもない、ユーモアのある、控えめな態度は、この方面において、我々文芸団の中で、彼女に匹敵する人はほとんどいないといえるだろう[18]。

謝冰心の「卑屈でも傲慢でもない、ユーモアのある、控えめな態度」と評される要素は、彼女の元々からの性格に起因するのだろう。さらに、燕京大学時代の恩師であるグレース・ボイントンも彼女の人柄に魅了された一人である。ボイントンは謝冰心の社交性について、1934年4月17日付の手紙の中でこう書いている。

先週、多くの賓客が来て――私は、記録にとどめられる二つの公式なディナーに出ました。一つは新たな学問の流派に属し、ロンドン中の有名人を知りつくす若いイギリス人男性を迎えるものでした。彼は婉瑩（謝冰心の本名）の人柄にただすっかり魅了されていて、二人の貴族の相互理解を目の当たりにして楽しみました。ハロルド・アクトン卿は伯爵である有名な学者の孫です。そして、婉瑩は婉瑩です[19]！

ハロルド・アクトン[20]（1904-1994）は、イタリア・メディチ家の研究で有名な人物である。1934年来夏し、中国の演劇や現代詩を研究し始めた頃であった。イギリス貴族であり、社会的にも地位の高い人間で、そうした人物を招く会食の場において、謝冰心はもてなし、魅了したのである。公式の場で、重要人物をもてなす社交的能力は1934年にはすでに発揮されていた。それは恐らく物おじせずまた飾らない彼女の人格からくるものなのだろう。

謝冰心の英語力、社交性に加えて、1955年の欧州訪問で代表団に選ばれた要素として、何が決定打になっただろうか。それは、前述した謝冰心における柔和なイメージの中にある。その中でも挙げられるのが「母の愛」だろう。

1955年7月10日、世界母親大会が閉幕する時、WIDFの会長であるウジェニー・コットン夫人が世界母親大会宣言を出した。その中で強調されたのが、「母の愛」であった。その箇所を見てみると、

平和と生活の尊重のためにたたかうすべての人たちを、偉大な母の愛でもって、支持しようではありませんが。人類の半数は女性です。私たちは、子供たちと世界の民衆に対して、負っている偉大な責任を、十分に自覚せねばなりません。すべての母性、すべての母親に呼びかけて、みんなを平和のための闘いに参加させましょう。今まで話し合うことの出来なかったすべての人たちの心と理性に話しかけましょう。自分の子供を愛するだけでは不充分であることを覚っていないすべての人たちに、子供たちを戦争から救わねばならないことを訴えましょう。孤立し、はなればなれでは何もできませんが、手を取りあっている限り、私たちは無数の強さを発揮できるのです。

全世界の婦人の皆さん！
私たちは、私たちの息子が互いに殺しあうことをのぞみません。私たちの子供たちをすべての民衆を愛するように育て上げ、憎悪と人種的偏見で、毒されないように守りましょう。

肌のいろの白、黄、黒をとわず、すべての子供は平等であり、同等の権利を有し同様に保護されねばなりません。私たちの子供を戦争からまもるために、軍備廃止と、すべての国民の間の友情のために団結をくずさぬことを、ここに堅く誓いましょう[21]。

と、「母の愛」でもって子供を戦争から救いだすとしている。そして母親の立場から、平和を目指すというものである。これはまさに、謝冰心が1920年代から『寄小読者』等の作品中で訴えてきたものである。彼女の「愛の哲学」に合致するものである。つまり、謝冰心が世界母親大会に代表として派遣されたのは、非常に適切な人選だったのである。

4、1955年前後の外遊と創作状況

1951年の中国帰国後、突然の政治の中に巻き込まれていった謝冰心であったが、帰国後の彼女の創作状況は如何なるものであったのだろうか。

1953年に謝冰心が表舞台に出てきた時の象徴的な作品として、「帰来以後[22]」がある。それには、以下のような記述がある。

私は自分の仕事を選んだ。それは、児童文学創作のために努力したいということだ。（略）

私は必ずしっかり社会主義現実主義の文学理論を学び、最近の文学作品を読んで研究し、群衆とつながりを持つ。私の作品の中で、努力して正しい芸術イメージを創造し、新たな人物を表現し、中国の児童に祖国の新たに生まれた、発展した、溌剌とした力を見せ、子どもたちを教養ある、楽観的で、英勇剛毅な社会主義社会の建設者になるよう鼓舞する[23]。

また、「『冰心小説散文選集』自序」それまでの創作に対し以下の自省を述べている。

その結果、私は家族の狭い輪の中に逃避し、階級社会では実践できない「人類の愛」を描き讃えた。同時に、私の対象と関心は、主に少数の小ブルジョア知識人にあり、「労働者・農民・兵士の大衆に、燃えるような闘争に、唯一の最も広大で最も豊かな源泉に向かって」行くことはなかった。大衆から切り離された私の人生は空虚だったので、私が書いたものはますます貧しくなり、ますます空洞になり、ますますやる気のないものとなり、ついには書き続けることができなくなってしまった[24]！

と完全にこれまでの創作を否定し、労農兵へと向かっていくとも言っている。これらの宣言について、前出の劉嶸はこう指摘している。

冰心は幼い頃から「自由に」書くことを志し、文章を書く状態を追求していた。彼女の考えでは、「自己を表現する文学こそが真の文学である」とし、創作は「個人の側で書くことの絶対的な自由であるべきだ」としている。（略）

しかし、新中国建国後、外国交流の使者、全国人民代表大会の代表、作家協会の会員として、冰心は「自由」な創作活動のアイデンティティを捨て、国家体制の一員となった[25]。

この宣言の後、謝冰心は確かに児童文学の創作に邁進し、児童文学者として認識されるようになった。彼女の1950年代の創作を概観してみると、帰国後創作を再開した1953年から59年の7年間の謝冰心の作品数を見てみると、1953年2編、1954年10編、1955年13編、1956年14編、1957年19編（うち1編は1955年に執筆、57年に発表）、1958年30編、1959年59編で、1958年以降急増し、職業作家としての創作活動が本格化したと言える[26]。この時期の代表作として挙げられるのが、『陶奇的暑期日記[27]』（1956年）、「小橘灯[28]」（1957年）、「再寄小読者[29]」（1958年～60年）であろう。

1957年の反右派闘争で、謝冰心の夫・呉文藻と長男・呉平、弟・謝為傑が右派に認定された[30]。家族の右派認定以来、謝冰心の状況は厳しくなり、作品もますます体制へと近づいていく。ここでは、帰国後の1953年から大きな変化をもたらした反右派闘争までの1957年までを範囲を取って、謝冰心の創作状況を見てみる。

王炳根は、1955年前後、1950年代の創作は主に児童文学と散文と翻訳の3つに分けて論じている。翻訳作品については、2回のインド訪問を通して、『印度童話集』を翻訳・出版した。それは中印友好の一環でもあった。散文作品の中に、外遊での見聞などを書いた文章が含まれる。「印度之行」「回憶我在印度的日子」「印度重游記」等のインド訪問についてのもの、「訪日観感」「広島――控訴的城市」「日本紀行」等、世界母親大会から帰国後すぐに訪問した1955年の8月に行った日本についての文章などである。

児童文学については、中国帰国以後の代表作となっている『陶奇的暑期日記[31]』と「小橘灯」を挙げている。王炳根は『陶奇的暑期日記』は、創作としてはやや劣り、「小橘灯」のほうを高く評価している。『陶奇的暑期日記』は「説教」的であるとのある評者の言葉を引きながら、その「説教」が概念化されたもので、こなれていないものだとも述べている[32]。

一方、「小橘灯」は、それ以前、1940年代に重慶にいた頃のことを思い出して書いたものであるが、王炳根は、「冰心が以前の物語形式に戻り、愛と共感の思想を貫き、以前の生活で蓄積したものを帰国後初めて使った」ので、「こなれた流麗な筆致で書かれて」おり、「愛情と憂鬱と楽観の精神が、芸術的な調和を実現した。」と評している[33]。

ここでは喜びと誇りがあるが、この種の芸術的魅力は冰心のもので

はない。彼女は描写の範囲を変えたと同時に、芸術的な特徴を変えた。明らかに両者は成功していない。冰心は新たに新中国の子供たちの人気を勝ち取り、彼女の文学性の特徴ある作品を勝ち取った作品はその後に発表された『小橘灯』であった[34]。

三つ目の散文に関して、王炳根は主に外国訪問の散文を中心に論じている。最大の特徴として謝冰心が「代表するのは国家であり、「私」ではなく「私たち」と表現するようになったのは、以前の外国訪問の散文では根本的に違っている。」としている点である。」この転換は、当時謝冰心が背負った外交担当者としての使命であり、またこれらの文章からもその任務を遂行している姿が窺われるという。さらに作品中に現れる「激情と誇り」はこの時期の散文の芸術的特徴としており、「新中国初期のイデオロギー言語と足並みをそろえているのである。」とも述べている[35]。

しかし、変わらないものもあるはずである。それは、彼女特有の「愛情と悲しみと楽観の精神が、芸術的な調和を実現した」要素とはどこに現れているのだろうか。1920年代から40年代の作品中にも現れた、子供、女性といった弱者に視点が現れた時ではないだろうか。この図式で考えてみると、必ず体制礼賛で締めくくられ、当時の「イデオロギー言語[36]」が散りばめられれた時事的散文にも現れるかもしれない。

1954年のインド訪問について書いた散文「回憶我在印度的日子[37]」には、弱者に対する描写が見られる。謝冰心は「不可触民」である貧民の村へ行った時、代表団を熱烈に歓迎する群れの中から、遥か後方にいた女性たちに気づいた。謝冰心は彼女達の前へ行き、強く握手し、抱きしめた。女性たちは言い尽くせぬ喜びと感謝の涙を流していたと書かれている。この女性たちは恐らく「不可触民」の中でも差別される非常に低い地位に追いやられた存在だったのだろう。謝冰心は弱い立場にある女性たちをすぐに見つけ、愛と同情を示す。だが、ここの描写はあくまでも出来事を述べたもので、謝冰心の心情が現れたものではないし、「私たち」という言葉が使われ、他に「イデオロギー言語」も頻繁にみられる。

外遊に関する文章の中でも、「私」という言葉が主語になり、ふと謝冰心の心情が出る瞬間がある。それは、原水爆禁止大会参加のための日本訪問について書いた一連の散文に現れている。「訪日観感[38]」では、主に若

者や被爆者との交流について書いている。

ある夜、東京滞在時期に乳母として雇っていた日本人女性が訪問してきた。子供の進学の話になり、親身に話し合ううちに、謝冰心はふと「話せてよかった！気が楽になった」と言った。日本人女性は大学への進学は学費が高く、非常に難しいこと、そのため、彼女の息子は母親である女性に対し感謝しながらも嘆いていることを聞いた。最後に「私は彼女を送り出し、彼女の細い背中が夜の闇の中に深く消えていくのを見て」とまで書きながら、すぐに「人を悲しませるような話はもうこれ以上書けない。私たちは苦い経験から覚悟し奮闘し、自信を持って前進してきた日本人の精神を語ろうではないか！[39]」と勇ましい言葉でこの場面を締めくくっている。

日本人女性との会見は、懐かしさも手伝ってか、一人の母親としての個人的な心情が現れている。さらに、謝冰心は母親としてこの日本人女性に強い同情を抱き、女性が去っていく時の情景は、まさに「憂鬱」で、感傷的である。1940年代『関於女人』で描いた重慶の市井の女性たちの姿とも重なる。

だが、最後に慌てて否定するかのように出た一文は、再び主語が「私たち」になり、「イデオロギー言語」が現れる。謝冰心は国家の代表であるという自意識が戻った瞬間を意図的に表現し、芸術と政治を絶妙に使い分けているとも考えられる。

他に、「広島――控訴的城市[40]」では、被爆者の入院病棟を訪れ、ある女性の悲惨な状況を目の当たりにして、激情を露わにしている。その被爆者は40歳過ぎで、原爆投下された時、背中に負っていた子供を亡くした。自らも傷を負いながらも、幸い3人の子供が生き残ったので、一生懸命働き続けたが、持ちこたえられず、とうとう入院してしまった。恐らく原爆病が進行していたのだろう。その女性に対し、謝冰心は激励の言葉をかける。

> 私はこう言った、「安心して療養し、勇敢に持ちこたえて、生きながらえてください！あなたたちの苦しみは世界中の平和を愛する人々の目にはすでにはっきりと映っているので、彼らはすでにきっぱりと立ち上がり、きっと世界中からあの万死に値する原子兵器を消滅させるでしょう。あなたたちは孤独で何も言えなということはありません。中国六億の人民が、全世界の億万の平和を愛する人民と、あなたたち

と共にいて、あなたたちを思いやり、激励し、慰めます。十年来の暗黒の歳月は、既に戻らないけれど、あなたの前途は希望があります。安心して療養してください！[41]」

「世界中の平和を愛する人々」、「中国六億の人民」、「全世界の億万の平和を愛する人々」「万死に値する原子兵器」など、「イデオロギー言語」が頻出する。謝冰心は激情のため、これらの言葉を続けて言うことができなかったという。被爆者の悲惨な状況を目の当たりにし、謝冰心は激しく心を動かされた。それ故、言葉を続けて言うことができなかった。インド訪問についての文章では、これほどまでの感情は表現されていない。やはり日本での見聞が非常に強烈であったことを示しているのだろう。「イデオロギー言語」をきっちりと使いながらも、「安心して療養してください、」といった心からの言葉も飛び出している。やはり、当時の「イデオロギー言語」と彼女自身の心からの言葉が入り乱れている箇所と言え、「愛と憂鬱と楽観の精神」を表現している箇所なのである。

上述の通り、世界母親大会を含む欧州訪問についての作品は残念ながら残されていない。また私的な「旅欧日記」にも備忘録的に記述のみで、彼女の心情を窺い知れる箇所はない。、だが、インド訪問、日本訪問に関する散文には、謝冰心における大きな変化とそして変わらないものを見出せるのである。

5、おわりに

1949年の中華人民共和国建国前、謝冰心夫妻は国民政府、中国国民党と密接な関係にあった。謝冰心一家は、1946年から51年まで滞在した日本を離れ、アメリカ行きを突如変更し、中国大陸へ戻ったが、その後、疑われて迫害されることはなかった。そして、1953年に表舞台に出てくるまで、潜伏期間を過ごし、その間、周恩来と会い、庇護を受けることとなった。その庇護を受けられた理由として、謝冰心が中国の新文学を代表する存在であること、英語能力など高い外交能力を買われていたことが考えられる。

さらに、夫の呉文藻が日本滞在時期に駐日中華民国代表団の中で収集した情報、文書を帰国後提出したという。貴重な情報を提供したことも謝冰

心一家にとって有利に働いた。謝冰心自身はその後、1953年に丁玲、老舎の紹介で中国作家協会に入会し、1954年9月には第1回全国人民代表大会の福建省代表として選ばれ、1958年の第5回まで務めた[42]。

建国後間もない新中国において、外交部門はまだまだ走り出したばかりであった。外交部門を担当した周恩来や廖承志にとっても、謝冰心は中国のイメージを上げる必要な人材だったのである。似たようなイメージを担わされた女性として李徳全が挙げられる。

李徳全[43]は、1955年世界母親大会参加の際、中国代表団の団長だった。当時は、中国赤十字会長、中国衛生部部長であり、前年の1954年には、中国代表団員、中国赤十字会長として、日本を訪問し、日本敗戦後、まだ中国大陸に残された日本人のリストを持参し、帰国事業について話し合ったことで、日本中にフィーバーが起こった。この時の実質責任者は廖承志であったが、李徳全を前面に出した。チャイナドレスを身にまとい、若い女性通訳を連れた李徳全の姿は、当時の日本人にとって、恐ろしい新中国、共産主義体制のイメージを壊し、「柔和な」「女性らしい」イメージを植え付けたという。

「柔和な」「女性らしい」イメージはまさに謝冰心が背負ったものである。しかし、李徳全と謝冰心の経歴を比較してみると、共通点と相違点が見られる。李徳全は、中華民国期の軍閥である馮玉祥の二番目の夫人である。馮玉祥は「クリスチャン・ジェネラル」と呼ばれ、馮、李ともに熱心なキリスト教徒であった。李徳全も謝冰心もミッション・スクールである貝満女子中学の出身で、謝冰心も燕京大学時代に洗礼を受けている。

相違点については以下の点が挙げられる。李徳全は貧しい子女のための教育を推進したが、その事業を通して、1930年代から中国共産党に接近している。1946年からの国共内戦では、中国国民党に反対した。新中国成立後は、前述の通り要職を務め、1958年には中国共産党に入党した。

一方、謝冰心は1940年代には国民政府のあった重慶に入り、中国国民党に近しい立場にあり、第二次世界大戦終了後も中華民国駐日代表団団員となった呉文藻と共に日本滞在した。帰国後は、中国共産党ではなく、民主促進会中央委員会という民主派団体の所属であった。

李徳全は、軍閥の馮玉祥の妻であるという前歴を基に迫害されることはなかった。また謝冰心も反右派闘争では右派認定されることはなかった。

実質上、両人ともやはり周恩来、廖承志が担う新中国の外交チームの重要な一員だったからであろう。

では、他の文学者は如何なる状況に置かれたのだろうか。同時代を生きた女性作家として、丁玲（1904-86）[44]と比較してみたいと思う。彼女は、1920年代後半から中国共産党に入党し、1937年には当時の共産党の根拠地であった延安に入り、一貫して共産党に忠誠を誓っていた。しかし、1942年延安で毛沢東による整風運動が始まる直前、「三八節有感」を発表した。これは共産党支配地域（解放区）の矛盾を突いたものであったが、却って激しい批判にさらされることとなった。

この時、丁玲は自己批判で乗り切ったが、毛沢東が編み出した「人民文学」を始めとする文芸政策方針に従っていくことになる。解放後は、『太陽照在桑乾河上』といった名作を生み出すが、反右派闘争では再び激しい批判にさらされ、その後18年間にわたって下放されてしまう。丁玲は一貫して、中国共産党に忠誠を誓っていた作家である。中国共産党の傾向として、自分たちに忠実な人間であっても、内部で批判や意見をし、方針に合わないと判断すれば、丁玲が受けたような処遇を下すのである。

一方で、解放前、国民党と密接な関係にあった謝冰心夫妻は、突如の帰国後も迫害を受けなかった。謝冰心は外遊に頻繁に出ながら、創作を再開。それは、周恩来からの庇護がまだある状況で、非常に恵まれた環境であったと言える。

つまり、外部からの有益な人間に対しては、最初の内は手を下さず、内部の人間で批判を行うものに対しては非情である傾向が、中国共産党にはあるのではないか。

1957年反右派闘争[45]では夫・呉文藻などの右派認定で、謝冰心は非常に苦悩し、作品も体制にますます従う傾向が強まっていった。自身は認定されなかったものの、結局、文化大革命のときには、夫婦ともども下放された。しかし、他の文学者に比べれば、まだ過酷なものではなかったと言える。それもまた周恩来の力が働いたのだろう。それ以降のことは、私的日記の解読を進めいき、今後、別の稿で書きたいと思う。

注

1：劉嶸「冰心日記中的時代生活　解読20世紀50－70年代冰心日記」（『愛心』第六十八

期　2018年秋、2018年9月）p25

2：冰心著、王炳根編『冰心日記』（作家出版社、2018年）pp.1-9

3：これは令和元年度國學院大學特別推進研究助成金（第109号）と科学研究費助成事業2020年度　基盤研究（C）20K00373の成果の一部である。

『冰心日記』「旅欧日記」の修正に関しては、牧野格子「令和元年度特別推進研究助成金研究成果報告書　謝冰心・呉文藻の1950年代～70年代の私的日記の解読」(2020年7月31日、内部発行）で詳しく書いた。

4：前掲、冰心著、王炳根編p1

5：HAŠKOVÁ, Hana “Czech Women’s Civic Organising under the State Socialist Regime, Socio-economic Transformation and the EU Accession Period”, *Sociologický časopis/Czech Sociological Review*, 2005, Vol. 41, No. 6, p1079

6：世界母親大会について、MACKIE, Vera, “From Hiroshima to Lausanne: the World Congress of Mothers and the *Hahaoya Taikai* in the 1950s“, *Connecting Women’s Histories : The Local and the Global*, edited by Barbara Rush and June Purvis, 2018 Routledge, pp.177-200を参考にした。

7：WIDFについては、de HAAN, Francisca,” The Women's International Democratic Federation（WIDF）: History, Main Agenda, and Contributions, 1945-1991”, *Women and Social Movements*（*WASI*）*Online Archive*, edited by Thomas Dublin and Kathryn Kish Sklar（essay online from October 2012）, http://alexanderstreet.com/products/women-and-social-movements-international（最終閲覧日、2020年11月18日）を参考にした。

8：モニカ・フェルトン著、阿部知二訳『あたりまえの女たち――世界の母親の記録――』（岩波書店、1957年）pp.88-105、英語原文を書籍化したものに、FELTON, Monica, with introduction an notes by Shigeru Osawa, *Ordinary Women*, Yamaguchi Shoten, 1958がある（未見）。

モニカ・フェルトン（Monica Felton,1906 -1970）は、イギリスの作家、都市計画者、女性運動家である。イギリス労働党に属していた。1951年、WIDFの朝鮮戦争真相調査団で北朝鮮に入り、金日成と会見した。その時の見聞を*That's Why I Went*（1954）にまとめた。1955年世界母親大会参加時、“Ordinary Women”と題してまとめた。1956年日本で開かれた原水爆禁止大会で来日し、この原稿を預けていったという。著書に*I meet Rajaji*（1962）等がある。

モニカ・フェルトンについては、前掲、『あたりまえの女たち』阿部知二によるあ

とがき、藤目ゆき「モニカ・フェルトンの軌跡 1952-1956」(『アジア現代女性史』第8号、2013) pp.6-38を参考にした。

9：インド代表団の中にGyanchandという人物名あり。(Women of the Whole World, No. 8-9, September, 1955, p. 18) この人物か。Anasuya Gyanchandはインド全国女性連盟 (National Federation of Indian Women) の第2代会長 (1957-1962) である。(https://www.india.com/topic/national-federation-of-indian-women/最終閲覧日2020年12月1日) あるいは、インディラ・ガンディー (Indira Priyadarshini Gandhi, 1917-1984, インド共和国第5代、第8代首相、ネルー・初代首相の娘) の可能性あり。

10：この人物に関しては不明。

11：日記原文「瑞士1955年7月6日 星期三」、前掲、王炳根編『冰心日記』p4

12：ウジェニー・コットン (Eugénie Cotton, 1881-1967) フランスの科学者、女性運動家。マリー・キュリーの弟子となり、物理と科学を学ぶ。1913年物理学者のエイメ・コットンと結婚。第二次世界大戦中はフランス共産党員として反ファシズム反乱軍を支援した。1945年女性国際民主同盟 (WIDF) の初代会長となった。("Qui était Eugénie Cotton ?", lycée Eugénie Cotton http://lyceecotton.net/joom3/index.php/fr/lycee/eugenie-cotton　最終閲覧日2020年11月15日)

13：この箇所に関しては、全国フランス婦人評議会HP https://www.cnff.fr/ (最終閲覧日、2020年10月29日) を参照した。

14：日記原本「瑞士1955年7月21日 星期五」、前掲、王炳根編『冰心日記』p8

15：翟強「従隔閡到建交:1949年至1964年的中法関係」(『中共党史研究』、2012年第8期) pp.14-27

16：萩野脩二「一片の氷心」(『謝冰心の研究』、朋友書店、2009年) pp.189-190

17：王炳根『玫瑰的盛開与凋謝——冰心與呉文藻——一九五一～一九九九年』(独立作家、2015年) p.37

五十年代初，西方甚至亞洲的一些國家，對社會主義國家懷有恐懼感，甚至視若洪水猛獸，因而，展示共產黨領導下新中國的柔性一面、人情味的一面十分重要。(略) 在團長不能帶夫人的情況下，女性團圓夜就顯得非常重要，它代表的是中國婦女，是中國母親，溫柔、美麗、睿智、賢慧，熱愛和崇尚甚或。此時的冰心甫一出現在國際舞臺上，變成了中國新中國女性形象的代言人。

18：夏衍「賛揚我的"老大姐"」(『花城』1981年第4期)、劉嶸「冰心日記中的時代生活解読20世紀50－70年代冰心日記」(『愛心』第六十八期　2018年秋、2018年9月) p28より引用。

19：Grace Boynton's letter to Miss Daniels, April 17, 1934

Last week was full of guests – and I went to two formal dinners which is a record. One was for a young Englishman who is a part of the modern school and knows all the celebrities in London. He was simply entranced with Wan Ying's personality, and I had great delight in watching the mutual understanding of two aristocrats. The Honorable Harold Acton is the grand son of a distinguished scholar who was also an earl, and Wan Ying is – Wan Ying!

20：ハロルド・アクトン（Sir Harold Mario Mitchell Acton, CBE,1904-1994）は、イギリスの作家、学者である。著書に*The Last Medici*（1932年）、*The Bourbons of Naples*, 1734-1825（1956年）などがあり、イタリア、インド、中国と多くの歴史、文学研究に功績がある。

アクトンは1933年から1939年まで中国に滞在、英文学を教え自活し、中国の文学作品を翻訳した。翻訳書には*Glue and Lacquer: Four Cautionary*（1941年）など。他に中国研究の成果である*Modern Chinese Poetry*（1936年）、*Famous Chinese Plays*（1937年）などがある。小説作品には、*Peonies and Ponies*（1941年）。アクトンは1939年にイギリスに戻り、イギリスとイタリアの関係改善に努めた。（"Harold Acton Papers"Archives at Yale, Yale University, https://archives.yale.edu/repositories/11/resources/800，最終閲覧日2020年11月21日）

21：前掲、フェルトンpp.227-229

22：「帰来以後」（『冰心全集』第4巻、1999年）pp.29-30　この作品は、1953年9月に書かれ、作品集『帰来以後』（作家出版社、1958年）に収録された。

23：同上p.30

我**选**定了自己的工作，就是：愿**为创**作儿童文学而努力。（略）

我一定要好好学**习**社会主**义现实**主**义**的文**艺**理**论**，好好研**读现**近的文学作品，好好**联**系群众。在我的作品中，我要努力**创**造正面**艺术**形象，表**现**新的人物，**让**新中国的儿童看到祖国的新生的，前**进**的，蓬蓬勃勃的力量，鼓舞他**们**做一个有教养的，**乐观**的，英勇**刚**毅的社会主**义**社会的建**设**者。

24：冰心「『冰心小説散文選集』自序」（『冰心全集』第4巻、1999年）p.72

结果我就退**缩**逃避到狭仄的家庭圈子里，去描写歌**颂**那些在**阶级**社会里不可能**实**行的"人类之**爱**"。同**时**我的**对**象和我的兴趣，主要是放在少数小**资产阶级**知**识**分子上面，我没有"到工**农**兵群众中去，到火**热**的斗争中去，到唯一的最广大最丰富的源泉中去"。脱离群众，生活空虚，因此我写出来的**东**西，就越来越**贫**乏，越空洞，越勉强；**终**至

于写不下去！

25：前掲、劉嶸p26

26：この箇所は、『冰心全集』第4巻、第5巻（海峡文芸出版社、1999年、豪華珍蔵本版）を参照した。なお、底本については、その後、2012年度版の『冰心全集』があるが、構成が異なるため、1999年度版を使用した。

27：『陶奇的暑期日記』は、上海文芸出版社より1956年5月に出版され、のち作品集『小橘灯』（作家出版社、1960年）に収録された。本論文では、『冰心全集』第4巻（海峡文芸出版社1999年）を参照した。

28：「小橘灯」は『中国少年報』1957年1月31日に発表され、後、作品集『小橘灯』に収録された。本論文では、『冰心全集』第4巻を参照した。

29：「再寄小読者」は、1958年から1960年まで「通訊一～二十」まで書かれている。「通訊一～七」は『人民日報』に、「通訊八～十」は『児童文学叢刊』に、「通訊十一～二十」は『児童時代』に掲載され、のち作品集の『小橘灯』に収録された。（『冰心全集』第4巻、1999年）。1940年代の重慶時代でも同じ題名で違う内容の「再寄小読者」が書かれている。「通訊一～二」は重慶の『大公報』に1943年～1944年に掲載された。（『冰心全集』第3巻、1999年）

30：前掲、王炳根pp.141-145

31：萩野脩二は、「一片の氷心」（『謝冰心の研究』、朋友書店、2009年）pp.191-199の中で、同じく1950年代の謝冰心の創作について論じている。その中で『陶奇的暑期日記』を「一つの地域社会に、周りから教え導かれながら生活していく「私」には、新しい社会に飛び込んできた冰心自身が投影されているであろう。「私」は熱心にこの新しい社会のうちに成長し、良い子になろうと願っている。その成長を周りもゆっくりと善意で見守っているという図式は、冰心自身の願いであったと思われる。」と捉え、また登場人物に関しては、「生活態度を改善しさえすれば、資本家といえども社会の構成員の一員として仲良く生活できるという楽観的な思考があることを示している。」謝冰心の作家精神が現れた箇所もあるとしている。全体的に王炳根のように消極的評価はしていない。

32：前掲、王炳根p144より呉林「讀『陶奇的暑期日記』」（『光明日報』1956年9月20日）を参照した。

33：前掲、王炳根p144

34：前掲、王炳根p144

儘管這裡有歡樂與豪情，但這種藝術的魅力不屬於冰心，她在轉移描寫視野的同時，

也在轉換著藝術的特長，顯然，兩者都不成功。讓冰心重新贏得新中國孩子們的喜愛、贏得她在文學園地中特色的作品，是隨後發表的《小橘燈》。

35：前掲、王炳根p144

36：イデオロギー言語とは、当時の社会的規範によって決められ頻繁に使われる言語のことを指すと感がえられる。王炳根は恐らく「毛主席」、「人民」「進歩」などを用い、社会主義国家において、向上、発展を目指すような文言を指していると考えられる。

37：冰心「回憶我在印度的日子」（『冰心全集』第4巻、1999年）pp,73-78

38：冰心「訪日観感」（『冰心全集』第4巻、1999年）pp,206-210

39：同上p.208

40：冰心「広島一控訴的城市」（『冰心全集』第4巻、1999年）pp.211-217

41：同上p.212

我说：“你放心疗养，勇敢地支持下去，活下去吧！因着你们的痛苦，世界上爱好和平的人民，眼睛已经明亮了，他们已经坚决地站了起来，一定要从世界上消灭这万恶的原子武器。你们不是孤苦无告的，有中国六亿人民，和全世界亿万爱好和平的人民，和你们永远在一起，关心你们，鼓励你们，安慰你们，十年来黑暗的岁月，已经一去不复返了，你的前途是有希望的，安心疗养吧！”

42：前掲、王炳根「第八章　帰来以後」を参考にした。

43：李徳全については、加藤徹、林振江『日中戦後外交秘史 1954年の奇跡』（新潮社、2020年）、程麻、林振江『李徳全―日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性―』を参考にした。

44：丁玲著、田畑佐和子訳『丁玲自伝―中国革命を生きた女性作家の回想』（東方書店、2004年）を参考にした。

45：反右派闘争時期の謝冰心夫妻については、前掲、王炳根、「第八章　帰来以後」で詳しく述べられている。右派認定され、改造教育を受けた呉文藻はその内容を同じように小さな手帳にびっしりと書いている。筆者は呉文藻の日記も閲覧したが、謝冰心の日記原本以上に解読困難と感じた。今後、呉文藻の日記も、解読を進めていきたい。

〔キーワード〕謝冰心、「旅欧日記」、『冰心日記』、世界母親大会、外遊

表①　謝冰心　1955年「旅欧日記」旅程

第1日	1955年 6月29日	中国→ソ連	北京離陸、正午ウランバートル着、空港は比較的粗末。従業員は殆どソ連人。夜イルクーツク着。ホテルの設備は良く、欧州式。街中は全く荒涼とした感じはない。
第2日	1955年 6月30日	ソ連	朝4時離陸、5時モスクワ到着。その間、ノヴォシビルスクを通過。草地にレーニン、スターリン座像。ノボシビルスクで「平和のために戦おう」と励ます女性あり。午後5時、モスクワ着。Hotel National泊。
第3日	1955年 7月1日	ソ連	朝3時目覚める。8時全団会議。9時朝食。後、部屋で草稿作成など。午後1時昼食、3時油絵展参観。7時夕食。後、会議、原稿について検討。夜10時片付け。
第4日	1955年 7月2日	ソ連→ チェコ	朝7時モスクワ離陸、10時国境通過。機内で朝食。12時半プラハに到着。Hotel Palace泊。昼食後入浴。夜7時夕食後、会議。夜10時就寝。
第5日	1955年 7月3日	プラハ	朝5時起床。入浴。7時朝食。8時体育祭の隊列を見に行く。10時戻る。昼食後午後2時半ゴットワルドの霊廟へ。フチークの遺体も見る。夕食後会議、夜10時就寝
第6日	1955年 7月4日	プラハ	朝6時起床。頭痛。朝食後会議。午前10時頃チェコ婦連の招待で市内全域観光。時計台、ユダヤ教会、ヤン・フス像、スターリン記念碑、カレル橋などを見学。午後公使夫人と会見。夕食後、夜10時に就寝。
第7日	1955年 7月5日	プラハ→スイス	朝3時起床。4時空港へ。6時離陸、8時チューリッヒ着。スイス大使館員が迎えに。9：27分乗車、11時35分ローザンヌに到着、団員が迎えに。Hotel Victor泊。午後休憩。文芸組会議、草稿の検討。インド団団長・肯徳夫人、団員40人のうち14人が同ホテル泊。
第8日	1955年 7月6日	ローザンヌ	朝起床、ホテルで朝食。午前、肯徳夫人と会談。午後3時半インド代表団と中国代表団5人が交歓会。夕食後、アジア組会議。同室の劉蘭が到着。夜10時就寝。
第9日	1955年 7月7日	ローザンヌ	朝7時起床。10時半大会開始。コットン夫人開会の辞を述べる。正午、インドネシア婦人と会談。午後、ドイツの（不明）夫人と会談。夕食後、ドイツ婦連と交歓。9時文芸組準備会。10時頃ホテルに戻り、就寝。よく眠れず。
第10日	1955年 7月8日	ローザンヌ	朝7時朝食後、8時半に会場へ。朝、李徳全の講演あり。アメリカ代表講演。昼食時インドネシア代表と交歓。午後3時半四巨頭会議書記委員会。5時ホテルで休憩。7時半会場に戻る。オーストリア代表が挨拶。9時会議、多くの国家代表が発言。深夜12時にホテルに戻る。すぐ就寝。
第11日	1955年 7月9日	ローザンヌ	朝、大会。昼食はアジア各国団と交歓。午後四巨頭会議書記会議。夕食、スイス婦連の招き。食後、出し物。10時頃戻る。シャワーの後すぐ就寝。早朝フランス人記者と会談。
第12日	1955年 7月10日	ローザンヌ	朝起床後大会へ向かう。発言を聞く。昼食日本代表団と交歓。午後、ルーマニア代表と会見、談話を約束。夕食、ソ連代表団と交歓。9時また会議。
第13日	1955年 7月11日	ローザンヌ	大会終了、午前中はホテルで急速。昼食は外で。後、張淑義の文書整理を手伝う。午後5時、曹孟君のところでフランス行きについての会議。夕食後、片付け、すぐ就寝。夜11時。
第14日	1955年 7月12日	スイス→ フランス (パリ)	朝9時半、列車でベルンに到着。Hotel City 泊。昼食後午後3時半、公使館で会談。夜7時ホテルに戻る。夕食後、9：54分にベルンを離れる。
第15日	1955年 7月13日	パリ	朝、6：35パリに到着、迎えあり。Hotel Capris泊。朝、少し休憩、ホテル到着後昼食。チェコ、インド、ベトナム代表同席。午後、バスで20区見学。M選区にて労働者住宅を見学。Rue de la Reunion。夕食後De la Mare 夫人ホテルまで見送り。夜11時就寝。

不明	補足	パリ	先に墓地へ。収容所及び抗戦犠牲者のため。
第16日	1955年 7月14日	パリ	朝国会へ。ルイ14世のホールへ。昼食後、住宅、学校、夕食後、人類学博物館などを見学。深夜1時にホテルに戻り、2時就寝。
第17日	1955年 7月15日	フランス	朝起床、ルノー五金工場の診療所を見学。無痛分娩法の説明。午後、Madam Paulette及びChristian Diorを見学。終了後、多くの人と会談。夜、ルーブル宮殿を見学。夜12時就寝。
第18日	1955年 7月16日	フランス	朝6時起床。7時バスに乗りSartheへCathédrale（大聖堂）を見学。Le Maurice市の住宅区を見学。牛乳工場を見学。夜10時パリ市内に戻り、11時頃就寝。
第19日	1955年 7月17日	フランス	朝カクテルパーティ。すでに11時に。12時頃、ナポレオン像や衣装などを見学。プチトリアノンを見学。夕方5時ホテルに戻り服を着替え、6時夕食。夜8時歌劇リゴレットを見る。深夜12時戻り就寝。
第20日	1955年 7月18日	パリ	朝、スイス大使館でビザ。正午市庁へ。副市長と会見。昼食後、ホテルで休憩。午後5時半、南アメリカ州クラブで会談。終了後、エッフェル塔へ。9時夕食後、婦連の招待会へ。11時ホテルに戻り、就寝。
第21日	1955年 7月19日	フランス	朝、障碍児病院で見学。昼食は参議院にて。D委員夫人の招待。昼食後国際教育センターへ。オールドミスが接待。学校と生徒の成績を見学。共選区へ。群衆会。ともに飲食。ホテルへ戻り、別のホテルで夕食。戻ってすぐ就寝。
第22日	1955年 7月20日	フランス	朝9時半起床後、Robinson（プレシス・ド・ロバンソン）市を見学。パリ郊外の観光地。市内に戻り昼食。後、ルノー自動車工場を見学。
第23日	1955年 7月21日	フランス	朝、商店見学。正午、中仏文協の招きで昼食。午後4時半、送別会とブレスリリース。終了後、フランス人家庭で夕食。12時就寝。
第24日	1955年 7月22日	フランス→ スイス	朝9時半朝食後、フランスの友人達が空港まで見送り。午前10時離陸。12時ジュネーブ着。大使館員出迎え、大使館で会談、昼食。午後3時6分の汽車でベルンへ。大使館員出迎え、またHotel Palaceに泊。シャワーの後すぐ就寝。
第25日	1955年 7月23日	ジュネーブ	朝起床後、朝食後銀行へ。午後買い物。夜6時大使館で会談。夕食後、片付け後、すぐ就寝。すでに深夜12時。
第26日	1955年 7月24日	スイス→ プラハ	朝6時、City Hotel を離れる。8時半に汽車でZurichへ。車内で朝食。9時半離陸。11時半プラハに到着。大使館員出迎え。Hotel Palace泊。午後1時昼食後、3時半まで昼寝。曹孟君の部屋で総括。8時夕食。シャワー後就寝。
第27日	1955年 7月25日	プラハ→ モスクワ	朝起床後、街中へ買い物。午後3時半、プラハより離陸。9時間でVilnius（ビリニュス）到着。夕食後深夜12時頃モスクワ着。Metropolis Hotel 泊。深夜3時半就寝。
第28日	1955年 7月26日	モスクワ	朝8時起床。午前10時朝食。12時張淑義と大使館へ。8月6日に日本での会議について聞く。戻って昼食後、午後5時まで昼寝。デパートへ行った後、北京飯店で夕食。戻って就寝。
第29日	1955年 7月27日	モスクワ→ スヴェルドロフスク	朝、淑義とTYM（モスクワのデパート）で買い物。昼食は北京飯店。食後、買い物。ホテルで休憩。午後4時15分、レーニン・スターリン陵墓へ。夜6時半夕食。7時半空港へ。9時離陸、深夜2時半、スヴェルドロフスク（現エカテリンブルク）に到着。
第30日	1955年 7月28日	ソ連→中国	スヴェルドロフスク離陸。夜7時ノヴォルシビルスク着。その後飛行安定。少し眠る。腕時計を見ると12：20だった。

謝冰心の私的日記原本　1955年6月29日～7月28日、王炳根編『冰心日記』「旅欧日記」より作成

表②　謝冰心　1950年代の外遊

年月日	場所	団長	活動内容
1953年11月27日 ～1954年2月4日	インド	丁西林	中印友好協会訪問団。中印友好協会成立大会。ヤンゴン経由、カルカッタ、デリーなどを訪問。
1955年4月2日 ～同年4月22日	インド	郭沫若	中国代表団。アジアアフリカ国家団結会議。デリーでの会議。
1955年6月29日 ～同年7月28日	ソ連、 チェコ、 スイス、 フランス	李徳全	中国婦女代表団。世界母親大会参加。
1955年8月2日 ～同年8月28日	日本	劉寧一	中国代表団。原水爆禁止世界大会参加。

萩野脩二「一片の氷心」（『謝冰心の研究』2009年、朋友書店）p190付表1より一部を抜粋し作成